

# 『日本一の手まりの里：由利本荘市』

手まり作りが盛んな地域は日本各地にあります（手まりマップを掲載しています）が、手まり作りが日本一盛んな地域は秋田県由利本荘市でしょう。「ごてんまり」は、広く手まりと言われ、日本古来の伝統美を持つ手芸品です。

由利本荘市観光協会の公式サイトや、由利本荘市発行の刊行パンフなどでは次のように紹介されています。

「手まりの歴史は古く、貞応2年（1223年）に手鞠会が盛んに催されたという記録があり、もともとは遊び道具として用いられたのが始まりと言われております。「ごてんまり」と言われるようになったのは、御殿女中たちが姫君のために手まりづくりの技を競い合っていた江戸時代からのようです。

手まりづくりが盛んに行われたのは、綿の栽培が普及し木綿糸がたやすく手に入れられるようになった江戸時代中期頃から昭和の初め頃までと言われ、江戸時代後期には、手まりは蛤殻を木くずで包み、さらに真綿で包んでから色系で巻いて仕上げたという記録が残っています。

全国各地にある「ごてんまり」の中でも三方に房が下がっているのはここだけという本荘の「ごてんまり」は、慶長17年（1612）に本荘（楯岡）豊前守満茂が本荘城に移城した折、大奥の御殿女中衆に手ほどきされたと言われており、これが次第に民間でも女の子の遊び道具として広まり、盛んに作られるようになりました。

その当時の作り方は、山菜の「ぜんまい」の先についている綿を丸めて芯にし、その上に機織りするときの織り端に残った糸を巻き、木綿糸でかがったものが多かったようです。

昭和に入りゴムまりが普及すると、遊び道具として「手まり」は使われなくなりましたが、その技法は脈々と母から子へ受け継がれてきました。

昭和36年に開催された秋田国体で本市が卓球、ソフトボールの会場となり、本市を訪れた選手・役員を始め、多くの人から本荘の「ごてんまり」の素晴らしさが認められ、高い評価を受けました。

こうした背景の中で復活した本荘の「ごてんまり」は、伝統の技を支えるごてんまり制作者はじめ関係者の熱意、努力により平成19年（46年振り）に開催された秋田わか杉国体でも、本市を訪れた選手・役員を始め、多くの人々に「美しさと技の粋 本荘のごてんまり」として変わらぬ高い評価を受けました。

また、本荘郷土資料館にて常設展「本荘ごてんまりと全国コンクールの歩み」が開催されており、第1回からのコンクール上位入賞作品の展示など、「全国ごてんまりコンクール」の歩みを振り返りつつ、「美しさと技の粋 本荘ごてんまり」の由来と特色を紹介する機会を提供しております。」

館岡豊前守とは最上義光の一族で、最上義光が関が原合戦の後、由利地方を与えられてからは、その地方の政治をまかせられ、慶長17年(1612)に鶴舞城（現由利本荘市）を築いて政治の拠点としました。豊前守は陪臣(大名の家来)でしたが、最上家の分限帳で見ると大名並みの4万5千石の禄高でした。

後(元和9年:1623)に本荘は六郷氏が領主(2万石)となりますが、本荘が酒田と近接した地域であったため、残されていた古い手まりも庄内の影響が強かったようです。

昭和36年の秋田国体の際、来県者に対する土産物を探していた当局にとって、復活されたばかりの手まりは魅力的でしたので、本荘手まりの特徴を出すために三方に下げ房をつけるなどの工夫を凝らすほかに、当局の意向を汲んだ地域新聞によって、それらしい「歴史」も創作されました。「館岡豊前守の奥女中云々」は「庄内手まりの影響が見受けられても当然」というストーリーでしょうが、現在ではその方が通りのよい話になっていて、ごてんまりは本荘を代表する民芸品になっています。